

中国と日本でのアレクサンドル・チェレプニンの活動における音楽教育的意義に関する研究

氏 名 王 文

論文内容の要旨

本論文では、アレクサンドル・チェレプニンがクラシック音楽の黎明期にあった中国と日本の音楽にどのように関わったかを検証し、その音楽活動が両国においてどのような音楽教育的意義を果たしたかについて研究を行うものである。先行研究において、チェレプニンの活動領域は、一般的に「作曲家」、「ピアニスト」として認識されているが、筆者が彼の音楽活動には「音楽教育者」としての意義に焦点を当てて研究を行った。

本研究のチェレプニンに関する資料の所在は以下の3箇所である。第1は、スイスのポール・ザッハ・ファンデーション (Paul Sacher Foundation) であり、ここにはチェレプニン文庫が収蔵されている。この文庫には、チェレプニンの、現存するすべての自筆の楽譜、出版された楽譜、日記、写真、演奏会プログラム、チェレプニンについて報じた新聞及び雑誌の記事、チェレプニンと関わった音楽家たちの手紙、チェレプニンの作品の演奏及び彼自身の演奏の録音資料を収めた全集がある。第2は、上海図書館上海科学技術情報研究所である。ここにはチェレプニンが中国に滞在していた時期の新聞、雑誌記事が収蔵されている。第3は、日本近代音楽館である。ここにはチェレプニン滞在時の日本語の音楽雑誌が収蔵されている。ここでの最も重要な資料は、チェレプニンが中国と日本で活動したときに自費で出版した中国人と日本人作曲家の作品の楽譜集「チェレプニン・コレクション」である。

1934 - 1937 年の3年間のうち、チェレプニンが中国と日本に滞在したのは実質2年6ヶ月であった。本研究は、この間のチェレプニンの両国での音楽活動を通して、彼の両国の音楽教育に対する教育観を考察し、その活動の果たした音楽教育的な役割を正しく評価することを目的とする。

本論文の第1章では、まず、チェレプニンの音楽活動の音楽教育的意義を明らかにするために、それらの活動を支えた思想を探った。彼の活動は、大きく

演奏活動とそれ以外の活動に分けることができる。さらに後者は、作曲の教授活動とピアノの教授活動の2つになる。その活動の根底には、1) 音楽の勉強は、民族性を持つ音楽から入門する方がよい、2) その時代の現代音楽をクラシック音楽より先に勉強する方がよい、3) ピアニストの使命は自国の作曲家による作品を演奏することである、という3つの観念が常にあり、これらが彼の音楽活動を支えていた。今回チェレプニンのこれらの3つの観念を当時の中国と日本の音楽家たちがどのように受け容れたかを検討してみると、中国と日本の音楽家たちの間には、それらの受け容れ方に違いがあることが分かった。

第2章と第3章は、チェレプニンの両国における活動及びその音楽教育的意義について論じた。本論文でチェレプニンの活動を大きく「演奏活動」と「教授活動」に分けた。

第2章では演奏活動について述べ、それらの音楽活動の持つ音楽教育的意義について論じている。チェレプニンは民間及び音楽専門教育機関で演奏会を開くことによって、一般聴衆に新しい音楽と出会う機会をつくった。また、中国と日本の音楽家たちの作品を、ピアニストとして自分自身の演奏会プログラムに取り入れ、外国の音楽家として両国の聴衆に彼らの民族音楽への尊重と尊敬の念を表した。この事は、中国では、「彼 [チェレプニン] の中国文化に向ける熱い心に対して、我々は心から感謝し、自分に対しては慙愧に堪えないと思う以外にないのである。」と1人の作曲家が述べているように、深い感謝の念を持って迎え容れられた。そして、自分たちが自国の民族音楽を大切にしていなことを恥じ、自分たちの価値ある民族音楽を大切にすることに目覚める者も現れたのである。

第3章では、作曲及びピアノにおける教授活動について述べ、それらの音楽活動の持つ音楽教育的意義について論じた。まず、作曲指導においては、チェレプニンは積極的に両国の音楽家と交流を行った。また、中国の国立音楽専科學校の唯一の外国人名誉教授としてピアノと作曲の指導を担当した。中国で作曲を指導した外国人教授としては彼が初めてであった。チェレプニンは、中国では、賀綠汀、劉雪庵、譚小麟、冼星海などの作曲家を指導し、影響を与えた。これらの作曲家たちは、その後の中国の作曲の発展に深く関わっている。日本では、清瀬保二を初め、江文也、伊福部昭、小船幸次郎らの作曲家と深く関わり、影響を与えた。

次に、チェレプニンが両国で発起した民族要素を取り入れた音楽作品を対象とする作曲コンクールは、西洋の真似ではなく、その民族独自の音楽を作り出すべきだという彼の理想を体現化するための実践的な取り組みであった。作曲コンクールの創設は、民族要素を取り入れて作曲する優秀な人材を発掘し励まし、育てることが主目的であった。そして、このコンクールは、これに関わった両国の作曲家の音楽観に少なからぬ影響を与えたのである。

また、出版活動を始めた事は、チェレプニンがコンクールの入賞者の作品を出版し、宣伝する場の必要性を感じたからであった。この出版事業は結果として多くの人々に自国の音楽家の作品に出会う機会をつくることと共に、音楽関係者に音楽が民族性を保つことの大切さを認識させた。

最後にピアニストであり作曲家でもあったチェレプニンが行ったピアノにおける教授活動においては、教師としてピアノ教授活動を行っただけでなく、4つのピアノ練習曲を作曲した。民族要素が取り入れられたピアノ作品を演奏するテクニックの養成には、それに対応するピアノ教材が必要だと考えて、自ら練習曲を創作したのである。この4つの練習曲には、5音音階に関わるあらゆる基礎テクニックと音楽的表現が考えられており、現在でも民族要素のあるピアノ作品の演奏技術の習得には欠かせない重要な練習曲となっている。

以上のように、ピアニストであり作曲家であったチェレプニンは、自分では音楽教育については語らなかったが、中国と日本の音楽を我が事のように親身に案じ、民族音楽と現代音楽が両国の音楽を発展へと導く鍵であると信じて、その観念を定着させようと幅広く音楽活動を行っただけでなく、こうした中国と日本における、これまでのチェレプニン研究が目向けなかったチェレプニンの様々な音楽活動の果たした音楽教育的意義の重大さを考えれば、音楽教育者としても評価されるべきではないだろうか。